

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 62 号

平成 19 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 金田福一「日々の糧 365 日」より (1)

金田福一 (かなだ・ふくいち)

大正 3 年 愛媛県城辺町に生まれる。

昭和 7 年 城辺メソジスト教会にて受洗。

昭和 28 年 生けるキリストとの出会いを経験。

昭和 35 年 日本キリスト教団三島真光教会に信徒伝道者として赴任。

昭和 41 年 日本キリスト教団補教師となる。

昭和 57 年 隠退。土居聖書教室および巡回伝道を続ける。

平成 4 年 2 月 25 日 召天

著書 「日々の糧 365 日」「霊想の糧 365 日」「恵みの世界」「臨在のキリスト」その他多数。

どこまでも、主は共にいてくださる

引退してから

私の引退前後

私は 1960 年、46 歳のときから 22 年間、三島真光教会 (愛媛県四国中央市) を牧会させていただきました。最後の 6 年間は心臓を患い、毎日発作を起こして、6 年間旅行もできませんでした。心臓喘息を併発したため、ついに引退いたしました。引退したとき、現金も預金

もありませんでした。移転をする費用もない有様でしたが、主にゆだねて祈りました。私が病気で引退することを教会の週報で読んだ三浦綾子先生が、速達でお金を送って下さいました。そのお金で、移転することができました。…

祈ってくださる方たちに近況をお知らせしようと思って、ガリ版で「土居通信」を 100 部印刷して送りました。それが大変な反響を呼び、毎日申し込みが殺到して、現在では毎月 1000 部発送しております。引退して 1 年後、7 年間続いた脈搏不整も、不思議に起こらなくなりました。それと同時に、各地の教会からお招きをいただくようになり、実に多忙な、恵まれた毎日を送っております。定収入は老齢年金だけですが、生活の必要も、豊かに満たされてまいりました。

私は若い時から、病気と貧困の道を生きてきましたが、何よりも大切なことは、主が生きておられるということです。そして、いつでも共にいてくださり、家庭の中にいてくださり、そのご支配の中に入れられているということです。また主は、いつも必要を満たしてくださり、平安を与えてくださり、生かしてくださるということです。

#### 定年後をどう生きるか

張りつめた糸がプツンと切れたような、放心したような老年を迎えてはいけません。キリスト者は、定年退職後も一貫して「キリストに従う者」であるということを、まず再確認してください。それからの生活の基本となることとして、朝起きてからまず聖書を読むということを実践してください。旧新約聖書の通読の日課を実行なさってください。一日に 5 頁あて読めば、1 年間で旧新約聖書を読破できます。「聖書を読む」ということは、神からの語りかけを聞くことなのです。赤線を引いて読んだり、書き写すこともいいでしょう。大切な聖句だけを、書きぬいてもいいと思います。そして、祈ってください。それから、散歩やジョギングもいいでしょう。

会社に行かなくなったからといって、ポカンとしていることは老

化を早めるだけです。何か奉仕するか、行動するかしてください。健全な趣味をお持ちになることもいいでしょう。何か一つのこと勉強なすることもいいでしょう。一日に1時間、一つのことを10年間勉強なされば、あなたは必ず、神様にも社会にも用いられる人になれることを、私はお約束いたします。私は小学校を出ただけですが、そういう道を歩いてきたつもりです。今も、そのように生きさせていただいているつもりです。

定年後に神学校に行って、伝道者になられた方もたくさんあります。素晴らしいことです。神様と教会になにかご奉仕なすることは、大きな祝福をもたらすでしょう。

最後に大切なことは、定年後に、急速に体力が衰えてくるという現実です。多くの方が、様々な、精神的・肉体的な、孤独との戦いを、経験していかなければなりません。悲しみや、寂しさや、不安も、味わうことでしょう。それは、人間の、老年の現実ですから、信仰者といえども、避けて通ることはできません。そのような日々からこそ、主イエス・キリストは生きておいでになり、常に、共にいてくださるという驚くべき恩寵の確信を、ご自分のものになさってください。たとえ悲しくとも、主は共にいてくださいます。あなた一人で、戦うものではありません。生けるキリストの御手の上に、あなたは乗せられているのです。生けるキリストの御手の上で、人生の夕暮れを眺め、御国での夜明けを迎えることができるのです。そして、主の平安に支えられて、ニコニコ笑って、感謝にあふれて、日々を生きて下さい。

「あなたは、わたしに従いなさい」(ヨハネ 21・22)

「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28・20)

(雑誌「いのちのことば」に出ていた記事)

1月2日

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。 (エペソ 1:7)

いつでも必要なこと、大切なことは、自分の罪を深く知っていることです。また、この罪人が赦され、用いられているという「ありがたい気持ち」を、いつも持っていることです。これがあるならば、人を悪くは言えません。人と争うこともないでしょう。どこに行っても人と争い、いつも人を悪く言う人は、自分の罪に気づいていないのです。また、これを持っているならば、不平不満もないでしょう。「私のようなものが、赦され、用いられている」という驚きがあるならば、どんな所に置かれようとも、どんな待遇を受けようと、口からつぶやきがもれるというようなことは、絶対にあり得ないのです。

1月5日

イスラエルの子らよ。あなたがたが反逆を深めているその方のもとに帰れ。 (イザヤ 31:6)

一人の人間の罪を指摘するのみで、体制の犯す罪に触れないとしたら、それは、欠けのあることです。しかし、体制の犯せる罪を責めることによって、おのれの神に対する罪を見逃しにするとしたら、それも誤りであると言わなければなりません。イザヤやエレミヤは、覚めた目で、時代の罪を指摘しましたが、一人の人間の、神に対する罪を、忘れることはしませんでした。むしろ、一人の人間の神に対する罪の自覚こそ、一切の物事の、根源であると言わなければなりません。この点において、権力の座にある人や、多くの人の上に立つ人は、おのれの所業の罪を、鋭く自覚して、悔い改めるべきであると思います。「悔い改めなさい」

## 1月11日

神の御前で、また、生きている人と死んでいる人とをさばかれる  
キリスト・イエスの御前で、……。 ( テモテ 4・1 )

「死んだら眠るのですか」と尋ねた人があります。「ステパノは眠りについた」とあり(使徒 7・60)、「眠った人々」という言葉もありますが(テサロニケ 4・13)それは、肉体を意味した言葉だと思えます。魂は、神のみ前に出るので、「死後にさばきを受ける」とあります(ヘブル 9・27)。この世を終わってなすべきことは、神さまへのご報告です。死んだら天国に行けると考えないで、まず、み前に出るということを、真剣に考えるべきです。「私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです」(エペソ 3・12)

## 1月13日

あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、  
また幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。  
( テモテ 3・14 - 15 )

子供に正しいしつけをすることができることも、神様の恵みです。今日は甘えの時代であると言われますが、それは、家庭がしつけを失ったことを意味しています。しつけるということは、子供を親の意思に従わせることではありません。むしろ、他人を尊重し、他人に親切にし、他人に迷惑をかけないように、厳しく教育することが、しつけということです。自分よりも、他の人を大切にすることは、しつけの根本です。また、ガミガミ言うことも、効果は全然ありません。子供を叱る時は、おのれの感情によらず、主に従わせるきびしさをもって、接するべきです。愛は、権威を失ってはなりません。

1月15日

そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。（ルカ24・23）

ほんとうのキリスト教とは、あなたが宗教的生活をすることではありません。イエスさまが生きておられるということは、全然別個の問題です。本当のキリスト教とは、生きておられるイエスさまと、かかわりのある生き方をすることができるようになることです。イエスさまが生きておられるということは、大変なことです。あなたが、自分のみにくさを痛烈に自覚したり、感謝に溢れた人になったり、喜びで夢中になったりしたとしても少しもふしぎなことではありません。それは、突然、生きておられる神さまの、力の注ぎを受けたからであり、イエス様の愛の中に、生き始めたからなのです。

1月18日

自分を愛するものを愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるのでしょうか。罪人たちでさえ、自分を愛するものを愛しています。（ルカ6・32）

助けなければならない人や、お世話をしなければならない人は、謙遜で、感謝にあふれた、かあいげな人ばかりとは限りません。傲慢で、感謝もせず、かあいげもない人をも、助けさせていただかなければならないこともあるでしょう。そういう場合、感謝されることを期待することは愚かなことです。感謝を期待するその罪をこそ、悔い改めるべきです。特に、知恵や信仰に自信のある人は、謙遜になれるものではありません。意識せずして傲慢であるからです。みずからの頼みとする知恵と信仰とが崩れ落ちる時、その悲しみの谷間から、初めて、祝福の日々は始まるのです。

1月20日

また、みだらなことや、おろかな話や、下品な冗談を避けなさい。

そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。

(エペソ5.4)

人への感謝を話題にするときは、その魂は美しくなりますが、人の欠点を話題にするならば、魂がよごれます。たとえ、こちらが正しくて、どうしても話題にしなければならぬ時にでもです。人の欠点を忍んでいる場合、その数々の出来事を、誰かに話したくてたまらなくなりますが、それを話したら、自分の魂が傷つくだけです。ようやくこらえて、誰にも話さなかったところで、神さまがほめて下さると思ったら大変な間違いです。人の欠点を話してはならないのは当然のことであって、むしろ、神さまに懺悔(ざんげ)しなければならないのは、自分の罪であるからです。「むしろ、感謝をささげなさい」

1月22日

また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈つ

て後、彼らをその信じていた主にゆだねた。(使徒14・23)

お祈りとは、イエスさまにお話しをすることです。キリスト者は、どんなことでも、イエスさまにお話しします。お話しして、おまかせするのです。おまかせするということは、私という人間を、現実の問題ごと、イエスさまの御手の上に、のせてしまうことなのです。お話ししたあとは、やっかいな問題や、人の顔に、眼を注いではいけません。イエスさまのお顔だけを、見つめるべきです。お話ししたあとで、泣きごとを言ったりする人は、御手の上にのせたはずのものを、また自分の手に、取り返すことになります。あなたは、そんなばかなことを、してはいけませんよ。「あなたの重荷を主にゆだねよ」

1月23日

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

(エペソ 3・17)

「私の内に、キリストがおられる」と、主観的に言ったとしたら、それは、異常な言葉です。「キリストの内住」ということは、感覚でも、体験でもないからです。それは、神の恩寵のわざに対する、客観的な信仰告白なのです。主イエス・キリストが、一人のキリスト者の心の内に入って、彼の人格を据え、ご自分のものにし、そのみわざをなさることが、信じられなければならないのです。主観的にいうならば、罪意識しかないかも分かりません。それでいいのです。キリストを宿した人は、いよいよ鋭く、自分の罪に気づくからです。しかし、そのような彼の内部に、キリストは御内住なさるのです。

1月27日

どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのか。(ローマ 8・32)

キリストの福音の根本は、「受ける」ことにあります。お受けしようとしなない傲慢さこそ、人間の罪です。キリスト者は、キリストをお受けするだけでなく、万事万物をもお受けいたします。もはや、立ち騒いだり、焦ったりする必要はありません。お受けしさえすればいいのです。お受けする者とされたその時から、溢れ出る感謝の喜びが体験されます。お礼を申し上げずにお受けするような、失礼なキリスト者は居ないはずで、たとえそれが苦しみでありましよう、死でありましよう。キリスト者の一切の奉仕も、献身も、お受けした結果にすぎません。献げさせていただいたことにより、お受けしたことの方が尊いのです。



## 2月2日

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」  
(イザヤ 43・1)

不幸の中に居るあなたを、主は発見されました。イエスさまにとって、あなたが「お入り用」なのです(マタイ 23・3)。イエスさまがお使い下さる限りは、生きる力も、必要な物も、必ず与えてくださいますから安心しなさい。あなたは、不幸に押しひしがれていました。しかし、主は、あなたの魂を解放されました。これからは、主があなたをして、この不幸を克服させて下さいます。それが、どんなに長く暗い道のりに見えようとも、主があなたと共に、歩んで下さいます。あなたはもうひとりではない。何が起きるか、興味をもって、見守って行きなさい。

## 2月4日

群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。

(マタイ 14・23)

祈りとは、自分の願望に、神を従わせることではありません。むしろ、神のみ心に自分を従わせようとするその調整の 때가、祈りなのです。また、神の御意志の、そのみ言を聞く 때가、祈りなのです。また、祈りとは、神の生命の注ぎを受け、生命に満たされる時なのです。主は、祈るために、ひとりで山に登られました。キリスト者もまた、祈るため、ひそかに戸を閉じて、ひとりになるのです。それはちょうど、充電をするようなものです。長い時間をかけて、充電できたと安心するのは誤っています。聖霊の働きは、むしろ瞬間的です。瞬間に、聖霊の充電を受けることこそ、キリスト者の祈りの秘訣です。

2月9日

ふたりでも 3 人でも、わたしの名において集まるところには、わたしもその中に居るからです。 (マタイ 18・20)

イエスさまのおいでになる集団には、明るい喜びと、暖かいやさしさがあふれています。そこに入る人は、主イエス・キリストを発見するのです。そして、聖書に書かれているみ言の約束と教理が、ほんとうであったと知るので。トゲトゲした他への非難や、冷たい言葉で、いくら聖書が説かれても、そこでキリストが発見されることはないでしょう。そこには、イエスさまがおいでにならないからです。イエスさまが御臨在なさる所には、聖霊の愛が、見えざる雨のように降り注がれていて、そこに入って来る人を、回心せしめずにやまないのです。あなたは、このことを信じていますか。

2月14日

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。 (ルカ 18・1)

何があっても祈るべきです。どんなことでも祈るべきです。無邪気な信頼をもって祈るべきです。いつでも、イエス様とお話しをするためです。しかし、高度の信仰は、自分の願いの成就ではなく、イエスさまがそばに居て下さることの感謝と充実感です。イエスさまがそばに居て下さるのですから、病気になろうと、困難なことに会おうと、ありがたいではありませんか。病気のいやしに固執するのは迷いにすぎません。その人の心は、イエス様で一杯なのではなくて、自分の病気のこと一杯なのです。イエスさまだけで心が一杯でない状態を、罪といいます。イエス様と感謝で、心はいつも一杯。

2月22日

大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。 (ローマ 12・5)

プロテスタントには沢山の教派があります。一つになれないことは残念なことですが、それぞれに異なった賜物を与えられて、神に仕えているのだと思うべきです。「一つの教会であるべきだ」という強い主張を持つ人たちも居ますが、「自分たちだけが正しい」という自己義認であるおそれがあります。大切なことは、教派を無くすることではなくて、でき得るかぎり親しく交わり、祈り合うべきだと思います。他の教派の方たちは、自分たちの持っていない、すぐれたものを持っておられると思うべきです。自分だけが正しいと思うなら、交わりは生まれません。自分の欠けだらけであることに気づくことが大切です。

2月23日

あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。 (コリント 12・27)

絶対に、他の教派を軽べつしてはいけません。無教会の方たちも、教会に対する軽蔑感を、無意識の底にも、秘めてはいけません。他を軽蔑することは、みずからを神のごとくに高くすることであって、神の祝福を失ったとしても、それは当然なことです。自分たちの考えや、やり方と、違う考えや、違うやり方をしている人々に対して、私たちは、軽蔑感をもつことがあります。低くされた心で交わって見ますと、自分たちの持っていないものを持っておられることが分かり、学ばなければならないことが、たくさんあることが分かり、驚くべき聖徒が、かつて軽蔑していた集団の中にもおられることを、発見できるはずで

2月25日

門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。（ヨハネ10・3）

主があなたにご用があつて、あなたをお呼びになったときは、顔を上げて、うれしそうに、「ハイ」と返事をしなさい。そして、主のご用は、あなたの繁栄している時や、幸福な時には、余りないようです。むしろ、あなたの病気や、不幸や、苦痛や、艱難そのものが、「主のご用」であると言えます。それらの嵐の中で、あなたをお呼びになる主のみ声を、聞きもらさないようにしなさい。そのためにも、み言に対して、いつも静かに、耳をすましていなさい。そして、最後に、主がお呼びになるときは、あなたの「死」の時です。主に呼ばれることの光栄を思うならば、笑って、顔を輝かせるのは、当然なことです。

3月1日

まことに、主は高くあられるが、低い者を顧みてくださいます。しかし、高ぶる者を遠くから見抜かれます。

（詩篇 138・6）

天国で評価されるものは、神学でも、教理でも、礼拝の形式でもありません。キリストに栄光を帰する謙虚さだけです。おのれの罪に気づいた謙虚さだけが、キリストに栄光を帰することができるのです。しかし、罪を知るということも、人間のわざではありません。報償を求める思いの伴わない罪告白は、人間には不可能なのです。人間の罪を示すことは、神にも痛みです。その痛みを耐えて、愛する者の偽善の衣服をはぎ取りなせる神のみ旨ほど、深いものではありません。その神のみわざに耐えることもまた、ふしぎな神の恵みです。そのみわざに耐えて、涙を流して、十字架の下にひれ伏すことを、謙虚と言います。